教員は親の代わりはできない

のっけから刺激的なタイトルで恐縮ですが、新聞や週刊誌などの記事においては小見出しやリード文が重要です。内容の軸となる部分を端的に示したり方向性や観点を明確にする意味がありますが、一番大きな要素は、読者の関心を得るところになります。ですから、「おっ、何が書いてあるんや？」と思わせることが大切です。ここまで読んでいただいた方には申し訳ありませんが、私の術中にはまった方と言えるかもしれません。「いやいや、学校から出ている文書は読むのが当たり前やろ。」とおっしゃっていただける方には「いつもありがとうございます。」と平身低頭してお礼申し上げます。今後もよろしくお願いします。

さて、前置きはこのへんにして内容に入りますが「教員は親の代わりはできない。」というのは教員の仕事は広範囲に渡りすぎているので線引きが難しく、「これは教員の仕事ではなく、親の仕事じゃないのか。」と思うところからきています。いわゆる躾(しつけ)の部分です。そして、それぞれの家庭にあるそれぞれのルールはどうなのかというのは我々の知るところではありません。

逆に、「親は教員の代わりはできない。」というのも真です。小学校ならいざ知らず、中学校の学習指導を親に求めるのは無理があります。当然、学習のことは学校が責任を持って当たるべきです。つまり、保護者の皆さんは「躾は家庭で責任を持ってするから勉強は先生がしっかり教えてほしい。」と言い、教員は「勉強は学校で責任を持って教えるから躾は家庭でしっかりしてほしい。」と言うのが筋としては正しいでしょう。いわゆる正論です。

しかしながらそう割り切れないのが現実です。生活習慣の乱れを家庭だけのせいにできませんし、勉強ができないからといって学校だけのせいにされても辛いものがあります。ですからここはお互い支え合い協力することが大切です。

例えば、先日の修学旅行では、高額の旅費を出してもらったこと、体調管理に気を使ってくれたこと、朝早くから起きて笑顔で送り出してくれたことなど保護者への感謝について話をします。（実際、出発式で津田教頭、解団式で中村学年主任が話しました。）子どもが当然のように感じている部分を「そうではないよ。」と気づかせるのも教員の役目です。生徒と直に接する担任は、普段の生活の中はもちろんのこと、道徳や特別活動で父母・祖父母に対しての敬愛の念を深める指導を行っています。また、私も出番は少ないのですが、卒業式、入学式の式辞には必ず親への感謝の意を表する内容を盛り込んでいます。

保護者の皆さんにお願いしたいことは、学校や教員のフォローアップです。できれば教員の熱心な指導ぶりを子どもに話してほしいのです。

なぜこんなお願いをするのかと言うと、間違いなく子どもに良い影響を与えるからです。保護者の方に信用されると教員もますますやる気が出ます。家庭も学校も子どもファーストです。子どもに何がプラスになるのかを第一に考えると、このような双方の協力が重要に感じます。

教員は親の代わりはできませんが、親の代わりは誰もできないことを教えることはできます。

裏面もご覧ください。

KAMINAKA JHS
学校だより　校長室より
2018/5/30
NO, 3

みなさん、本を読んでいますか？

「忙しくて本を読む暇がない。」という言葉をたまに聞きます。本当に全く読む暇がないのでしょうか？　きれい好きな人はどんなに忙しくても掃除の時間をつくり、部屋や車の中をきれいにします。汚い部屋で過ごすのが苦痛なのでしょう。私の知っている教員で多忙感いっぱいなのに毎日早朝ランニングをする人がいます。また、休日になると嬉々として田んぼや畑に精を出す人もいます。中には好んで弾丸海外旅行をする人もいます。忙しいのだから休日ぐらいゆっくり休めばいいのに…と思いますが、スケジュールを調整して時間をつくり出かけていくのです。つまり、好きな人にとってはランニングや農作業は肉体的につらくても精神的に楽なのでしょう。

読書も同じです。まず、読書の習慣のある人は、読書を勉強だとか知識を得る方法だとか何か特別のものとは思っていません。ただ単に読むのが好きなのです。読んでいると落ち着くのです。こういった素地を作るために学校では朝読書や給食配膳中の読書を勧めています。この素地や習慣のない人にとって読書は苦痛に感じるようです。

朝の読書の風景

保護者の方の中学生時代（私が担任をしながら国語を教えていた時代）には活字離れが大きな問題となっていました。当時はあまり読書指導に力を入れず、５教科中心の「詰め込み教育」や「偏差値教育」などが主流となった時代です。その後、その反省からいわゆる「ゆとり教育」にシフトしていきましたが、また揺り戻しの時代となっています。そういった時代背景から、多分保護者の方は中学校時代に読書をした経験が少ないのではないでしょうか。当然全員ではありませんが…

また、外的環境として、学校図書館の蔵書数が少なかったり中学生にとって魅力的な本が少なかったりしたのも要因でしょう。近くに公共図書館や大きな書店がなかったのも要因かもしれません。今はパレアはあるし、ネットで注文すれば明日届きますよね。便利な時代です。

ということで、小中学生の時代だけで比べると保護者の皆さんより今の子どもの方が読書の習慣はあるように感じます。小学校時代にやっていた「読み聞かせ」「親子読書」「読書貯金」などの取組を思い出してもらえれば納得してもらえるのかなと思います。

それで何を言いたいのかというと「中学生でも親子読書をしませんか？」ということです。子どもに面白かった本を教えてもらい読むのです。逆に面白かった本を子どもに紹介するのもいいですね。「ああ、こんな本を面白いと思っているんだなあ。」という新しい発見があるでしょうし、わが子の成長を感じることもあるでしょう。親子で同じ本を読んで感想を言い合うなんて何てステキなことでしょう。そして、なんと文化的水準の高いことでしょう。と私は思います。

読書については得意分野なのでまたいろいろと情報提供していきます。

上中中学校
School paper from principal